

岩倉使節団よもやま噺

小野博正

第一話 岩倉使節団をめぐるお金の話

ここには、岩倉使節団と明治維新前期のお金に関する話を集めてみました。

1・岩倉使節団の回覧中の報酬や支度金はいくらぐらいだったのでしょうか。

| | 使節団の支度料 | 別段手当 | 毎月手当（ドル＝円） |
|-------|---------|------|------------|
| 岩倉大使 | 900両 | 600両 | 500ドル |
| 副使 | 540両 | 500両 | 400ドル |
| 一等書記官 | 375両 | 150両 | 250ドル |
| 二等書記官 | 250両 | 100両 | 200ドル |
| 三等書記官 | 250両 | 80両 | 180ドル |
| 四等書記官 | 180両 | 70両 | 150ドル |

岩倉使節団派遣の総費用は、当初予算50万円＝50万両＝50万ドル。旅程が1年9カ月余に延びたことで、最終的には100万円程度と見做されています。その費用はどこから調達したのか詳しくは分かっておりませんが、派遣前年の1870年にロンドンで外債100万ポンド（488万円）を鉄道建設名目で調達しています。鉄道建設にはそんなにかかっていませんので、そこから捻出されている可能性が高いと思われます。因みに、1871年の新政府税収は1300万円でした。100万円は大きな金額でした。

2・「白脛に見とれもせぬに150ぼんと落とした久米の仙人」の狂歌の意味とは。

使節団は米国回覧中に長州出身の南貞助の勧誘があつて、安全で金利もつくからと彼の勤める銀行に何人かが預金しました。この銀行が、火災が原因で回覧中に倒産してしまいました。蒙った被害総額で25,000ポンド（12万5000円＝ドル）であったと言われます。幸い公金の50万ドルは金庫番の大蔵理事官・田中光顕が警戒して預けなかったのが助かりました。損害は、すべて個人の金と、尾崎三良が欧仏留学生費用として田中から預かった分のみですみました。

大島高任 186ポンド（930円）—120円5銭＝800円余）

塩田三郎 600ポンド（3000ドル＝3000円）

久米邦武 150ポンド（750ドル＝750円）

「白脛に見とれもせぬに150 ぼんと落とした久米の仙人」

我が、久米邦武は謹厳実直なのに、150ポンドを損したとの狂歌です。

(因みに、富岡製糸場の一等女工の年俸が25円であった時代です)

3・使節団派遣当時の、船賃と鉄道賃は幾らくらいだったのでしょうか。

明治6年 花房善賢の記録によると下記の通りです。(5フラン=1ドル=1円)

| | | | | |
|-------------|----|----------|----------|----------|
| 横浜・マルセーユ船賃 | 一等 | 2,375フラン | 二等 | 1,780フラン |
| | 三等 | 1,710フラン | | |
| マルセーユ・パリ鉄道賃 | 一等 | 106フラン | 二等 | 79フラン |
| | 三等 | 58フラン | (成島柳北 上等 | 110フラン) |

* 下記太平洋郵船の運賃は実記・泉三郎氏著書による。

| | | | | |
|---------------------|----|---------|----|---------|
| 横浜・サンフランシスコ船賃 | 一等 | 275.5ドル | 二等 | 175.5ドル |
| 大陸横断鉄道賃：サンフランシスコ・NY | 一等 | 140ドル | 二等 | 104ドル |

4・使節団派遣前後(1874年)の政府役人の月給はいくらぐらいだったのでしょうか。

日本官吏月給俵(1874年)

| | 官職 | 等級 | 月給 |
|-------|----------|------|------|
| 三条実美 | 太政大臣 | 一等勅任 | 800円 |
| 岩倉具視 | 右大臣 | 一等勅任 | 600円 |
| 大久保利通 | 参議 | 一等勅任 | 500円 |
| 山尾庸三 | 工部大輔 | 二等勅任 | 400円 |
| 山口尚芳 | 外務少輔 | 三等勅任 | 300円 |
| 芳川顕正 | 工部大丞 | 四等奏任 | 250円 |
| 星 亨 | 租税寮権助 | 六等奏任 | 150円 |
| 名村泰蔵 | 司法省七等出仕 | 七等奏任 | 100円 |
| 浜尾 新 | 開成学校八等出仕 | 八等判任 | 70円 |
| | 文部省九等出仕 | | 50円 |
| | 同 十等出仕 | | 40円 |

因みに明治11年山県有朋は、小石川目白台に18000坪の土地を、2000円で購入して、椿山荘を建てました。その時の、山県の収入は、参議500円、陸軍卿500円、陸軍中将400円、議定官300円を務め、総額月給は1700円でした。太政大臣(首相格) 三条実美の2倍余であったとされます。

5・お雇い外国人の俸給は政府高官並みかそれ以上と聞くが、どの程度貰っていたのか。

お雇い外国人月給表（往復の旅費政府負担、西洋風住宅無償供与付）

| | | |
|--------|--------|-------|
| フルベッキ | 南校教頭 | 600円 |
| カーギル | 鉄道差配役 | 2000円 |
| モルレー | 文部省学監 | 600円 |
| ロエスレル | 外務省顧問 | 600円 |
| ジュ・ブスケ | 左院雇い | 600円 |
| キンドル | 造幣首長 | 1045円 |
| シャンドル | 紙幣寮雇い | 450円 |
| モース | 東京大学教師 | 350円 |
| フェロノサ | 東京大学教師 | 300円 |
| ダイエル | 工部大学教頭 | 660円 |

政府高官の月給とお雇い外国人の月給を比較すると、如何に明治政府が西洋文明（技術）導入に真剣だったのか分かります。こうして外国人教師により教えられた日本人が育つと、徐々に日本人に代っていきましたが、技術系は長く雇用されました。1874年工務省関連外国人が一番多く、総額76万余円、通常経費227万円の33%に相当しました。

6・その当時の一般の物価などはどうだったのでしょうか。

権小属 月給 25円 大蔵省印刷局准判任御用掛 月給 40円
師範学校 上等生 10円、下等生 9円を政府（文部省）が支給
秩禄公債（明治7年） 一石＝95銭 一銭でウナギ5串の時代
浜松の郷宿下宿代（母子二人で） 月6円
夏目漱石の『門』より、もり、かけ8厘（明治24年1銭）、種もの2銭5厘
牛肉並一人前4銭、ロース6銭、学生仕送り月7円（中）、10円（上）

7・女子留学生の一人あたり留学費はどこから捻出され、幾らぐらいだったのか。

女子留学生の派遣は、これからの日本は、子どもを産み育てる女子教育が大切と考えた北海道開拓使次官の黒田清隆の発案で実現したこともあり、北海道開拓使予算（10年間で1000万円＋追加400万円）から歳出されました。5人の女子留学生の留学滞在費用は、年額1000ドル（＝円）×10年間で予算化されていた

ました。女子留学生3人（2人は早々に帰国）が10年後に帰国した時には、すでに北海道開拓使は役割を終えたと廃止されており、戻った女子留学生は帰属先がなく、途方に暮れたようです。尚、岩倉使節団同行の留学生、それ以前に留学していた藩費の留学生も廃藩置県後は藩には歳入がなくなり、全て政府留学生に切り替えられていきました。不良留学生の整理や勉強部門（テーマ）の指導なども、使節団の役割ともなりました。

8・明治初年での、外貨換算レート、日本の円・両など貨幣価値や財政状況について。

実記の『例言』によると、当時の貨幣は1ポンド＝5ドル＝25フラン＝5円です。
（実質は、横浜交易所交換レートでは4円56銭だったとも言われます）

明治維新政府は、1871年1月に銀本位制を採用し、メキシコ銀1ドルとほぼ同一品位の1円銀貨を鑄造することを仮決定しましたが、その後、アメリカに財政制度調査の為に派遣された伊藤博文大蔵少輔の意見を入れ、欧米主要国に主流であった金本位制を採用しました（新貨条例—1871・6・27発布）。

理由は、1両（万延二分金2枚）がアメリカ1ドル金貨にほぼ等しいこと、「両・円対等」とすることで、1両＝1円という読み換えで新通貨に移行し、連続性が保てるからでした。1872年と1873年に、約4300万円の本位金貨が鑄造されました。然し、アジアでの決済は銀が主流であり、国内に巨額のメキシコ銀が存在したので、開港場では、メキシコドルと略同品位の「貿易一円銀」の無制限通用権が付与され、本位金貨と貿易銀の金銀比価を、1対16と定めたので、実質金銀複本位制とも呼ばれました。

尚、明治初年には、歳出の87%を政府紙幣と借入金に依存していましたが、明治政府は、まず全国に徴税権を確立し（1871年廃藩置県）地租を改正して税収を現金で確保しました（1873年地租改正）。歳出面では、旧士族などへの秩禄の支給を大幅に整理しました（明治維新の3462万円から10年で6割削減—1283万円へ）。この結果、1874—75年には、財政収支は債務の元利償還分を除けば黒字（プライマリー黒字）を実現しておりました。戊辰戦争などで、商人などから調達した御用金は384万両に上がりましたが、豪商からの献金なのか、富裕税なのか、借入金なのか不分明の上、限界もあったので、次第に欧米での発行の国債に依存することとなりました。（『明治維新期の財政と国債』—富田俊基著）

以上